

学校現場から悲鳴が聞こえる

第3回「担当に負担の大きい就職指導・・・授業準備にも支障が・・・」

長引く不況で高校生の就職難は深刻です。就職を担当する教師は春から企業訪問を行い、求人依頼をします。記者も経験がありますが、一日に数十キロも車を走らせ、会社に入ればクーラーが効き、車に戻れば車内温度は50度にも達し、体調を崩してしまうこともありました。一人でも就職を叶えてあげたいとどこの学校も必死です。

高学歴指向や就職難ということもあってか、商業、工業、農業高校などの専門校も大学や専門学校への進学が増加し、今や6割強が進学となっています。しかし、上級学校へ進学しても就職の厳しさは変わらず、大学生の4割が就職できないという実態もあります。

今回は、高校で進路を担当している教師からの声です。

夏休みが山場

記者「就職担当者の仕事はどういった流れになっていますか」

C氏「あなたが先に言ったように、数十社に及ぶ企業訪問から始まり、企業の採用情報や動向についての情報を得ます。夏になれば企業からの来客対応があり、また郵便で送られてくる求人票の整理と休む暇もなく続きます。」

記者「確かに授業の合間に就職の仕事ではなく、就職の仕事の合間に授業をしているといった感じですね。」

C氏「もちろん授業は大切ですが、授業準備はさておいてといったところですね。夏休みになると最初の2週間で生徒の企業訪問の山場となります。その1週間前から生徒の企業見学の希望をとりまとめ、企業との折衝をします。生徒の希望と企業との調整の一覧表作りがむちゃくちゃ大変です。こ

れはやった人でなくてはわからない。生徒たちは夏休みに入って企業を訪問し、実際に見て、自分はこの仕事が勤まるのかどうかを考えます。」

自己理解を深めよ

D氏「自分はこの仕事が勤まるかを考えると言いますが、実際にはどうでしょうか。就職難は事実ですが、生徒や保護者にも様々な問題があると思います。生徒に言いたいのは自己理解は確かですか？、自分がどういう人間性を持っているのか、クラス、部活動、友人関係のなかではどんな役割・存在なのか、成績や出欠状況、能力も大切ですが、職場にも人間関係があります。真面目でおとなしいから事務職といっても、書類やお金だけが相手ではありません。事務職の職場がどんなところにあるかも大切です。独立した建物の場合と、生産や販売の現場にくっついている場合では状況は全く異なります。ファッションに関心があるからアパレル販売職と言ってくる生徒がいます。自分の美的感覚を磨く努力を続けていますか、自分が苦手なタイプのお客相手に接客ができますか。ついこんなことを思ってしまうですね。生徒自身の問題として、こうした自己理解不足や企業研究不足、思い込み、見栄などがあります。保護者にはこの企業あるいはこの職種でなければ認めないといった強制をよく見かけます。」

C氏「全く同感ですね。本当に考えているのかというところもね。何か良いところはないですか、と人任せのところもある。苦労して企業との訪問計画を立て、地図も用意し微に入り細に入り準備していても、指導を

受けるのを怠ったために企業見学の日を知らなかった、忘れたと行って行かなかったなどとんでもないことが起きる。担当者は企業に頭を下げ、嫌な思いをする。夏休みの後半は面接指導や履歴書指導に追われる。担任も同様ですが、夏休みは就職指導、進学指導の一色となる。夏休みだからと言って長期間のまとまった休暇など現実にはとれる状況ではない。どっと疲れを感じながら2学期を迎えます。」



記者「私は商業高校を出ていますが、時代が違うので同じにはいえませんが、当時の担任からは会社四季報を買って読めと言われました。資産状況や営業成績などを見てましたね。」

生徒も保護者も地域からの求人に頼る傾向が強い

D氏「就職指導の難しいところは、担当者が世界情勢を始めとして全国情勢、群馬県情勢を理解していても、生徒たちの目の前にあるのは、学校区域の企業からの求人情報だけです。広域・長期的な視点で指導したいのですが、生徒・保護者は今目の前にある求人左右されてしまいます。ある企業は伝統的に現在の景気のみで求人をしてきます。すると生徒も保護者も飛びつくのですが、今後のその業界の動向を思えば二の足を踏んでもいいかと思ってしまうので

すが。また医療事務ですが、少数とはいえ高卒求人がある群馬県は全国的にもまれな地域です。カルテ等の書類や金銭の扱いだけではなく、患者さんやそのご家族との接遇もあることから、高卒レベルでの職種ではないというのが全国的な傾向です。さらに、接遇に比べて勤務がハードであることとIT化の進展と経費節減の影響もあり、現在はパートや派遣社員が主力です。医療事務を養成する専門学校はいつでも学生募集に苦慮していますが、群馬では待遇は多少悪くても事務職という志向が一般的で、高校生のなかでも根強い人気があります。」

本来は職安の仕事

C氏「本来この進路指導と名付けられた仕事のうち就職に関する仕事は職業安定所の仕事なんですね。職業安定法26、27条の規定に依っていますが、この法律ではあくまでも職業安定所が主であるわけです。つまり本来は職業安定所が行う仕事を学校が代わって行っています。厳しい言い方をすれば本来の業務でもないのに教員は就職指導に多くの時間をとられ、授業もままならない状況に追い込まれている。こうした現実を見ると、この業務には教員を当てるのではなく、職業安定所の専門官が出向して専従で行うべきと思う。こうしてこそ、生徒たちは適切な企業情報を得、適切な企業に就職できるのではないかと。教師は落ち着いて自分の専門教科と向き合い、その分野での生徒の成長に貢献できるのではないかと。」

記者「就職指導を巡ってはまだまだ多くの問題がありそうです。進学指導には触れられませんでしたので次回につなげたいと思います。いずれにしても年間を通して休む暇も無く指導に追われていることがよくわかりました。」